
教職員の皆さんと共に 子どもへの暴力のない明日への 1歩を踏み出すために

すべては子どもの“安心・自信・自由”に



NPO 法人 CAP センター・JAPAN

はじめに

2012 年度、CAP センター・JAPAN は独立行政法人福祉医療機構の助成を受け、「子ども虐待早期発見への地域拠点強化」事業として、園・学校単位での教職員ワークショップの実施と地域セミナーの開催、さらにプログラム実践に取り組む CAP スペシャリストの研修を 3 つの柱として取り組みました。

2012 年度は「子ども虐待防止」をテーマにして、学校単位で校内研修として教職員ワークショップに取り組んでいただく準備を始めた矢先に「いじめ自殺」が起こり、社会の関心は一気に「いじめ」に向かいました。さらに「体罰による自殺」が起こり、今度は社会の関心は「体罰」へ。

立て続けに起こる「子どもへの暴力」に、子どもはもちろんのこと、おとなが無力感を感じているような気がしています。今こそ、子どもへの暴力について正しい知識で向き合うべきときです。園・学校という様々な背景を持った子どもたちが来る場だからこそ、できることがあります。

私たち CAP は、行政の皆さんや先生方と連携・協働しながら、子どもへの暴力のない社会へ、明日への 1 歩を踏み出していきたいと思っています。

子どもたちを

暴力の被害者にしない、

加害者にしない、

傍観者にしないために

おとなにはできることがあります。

子どもにはできることがあります。

私たちはともに信じることができます。

私たちはともに語り合うことができます。

私たちはともに考えることができます。

私たちはともに助け合うことができます。

そして、私たちは繋がり合うことができます。

新しい明日のために。

2013 年 6 月

NPO 法人 CAP センター・JAPAN

■独立行政法人福祉医療機構助成事業「子ども虐待早期発見への地域拠点強化事業」

2012 年度、特定非営利活動法人 CAP センター・JAPAN は、福祉と医療の民間活動を支援する「独立行政法人福祉医療機構」の助成を受け、「子ども虐待早期発見への地域拠点強化事業」を実施しました。

この事業は、保育所・幼稚園・学校等が

- 1) 社会的課題である子ども虐待防止において重要な早期発見の役割を果たす拠点として
- 2) 子どもの視点にたった支援を行う地域拠点として
その力が存分に発揮されること、地域で活動する CAP グループがこれらの地域拠点とつながり、サポートを行うことを目的として実施したものです。

子どもへのあらゆる暴力のない社会をめざすために、CAP プログラム実践団体(CAP グループ)が協働者となって、全国的・広域的なネットワークのもと本事業を行いました。

今年度は、テーマを「虐待防止」として地域ごとに研修メニューを作成して学校ごとに選択していただき、さらに打ち合わせを行ってできる限りニーズに沿う形で教職員ワークショップを実施しました。

今回の教職員研修メニュー例（約 2 時間の研修）

学 校

- A. 子ども虐待基本編
- B. 子どもの問題行動の背景にある子ども虐待
- C. ドメスティック・バイオレンスの子どもへの影響
- D. 子どもの性的虐待と子どもへの影響 など

保育所・幼稚園

- A. 保育園における子ども虐待の早期発見とその後の対応
- B. 保育園における虐待の早期発見と保護者への関わり
- C. ドメスティック・バイオレンスの乳幼児期の子どもへの影響
- D. 気になる乳幼児期の子どもの背景にある子ども虐待 など



■この事業で使用した資料「教職員ワークショップ冊子」

本事業では、保育所・幼稚園・学校等の保育士・教職員等が主体的に取り組むことができるワークショップ形式をとり、その中で資料集として「教職員ワークショップ冊子」（2011 年 5 月第 2 版発行。第 2 刷 2012 年 7 月）を使用しました。この資料集は、全 40 ページにわたる内容で、5～6 年間を目安に教職員ワークショップ研修で触れる内容を網羅しています。

*目次は p.11 に掲載します。



↑教職員ワークショップで使用した資料

本事業による成果と今後の課題と展望

本事業における取組の成果と今後の課題と展望をアンケートの分析から得たものを含め、ご報告・ご提案します。

I. 子ども虐待防止の地域拠点事業の成果

1. 今回の研修実施によって、起こるかもしれない危機に備えることの重要性が認識されました。

何かが起きる前の危機に備える予防のための研修は、学校単位ではなかなか実施が難しい現実があります。特に虐待予防については、そもそも子ども虐待が見えにくく、事態が深刻化するまで周囲が危機意識を持ちにくいことがその要因として挙げられます。しかし学校全体で研修に参加し、事前に子ども虐待に関する知識・スキルを共有することで早期発見・早期対応の可能性は高まります。今回、研修メニューとして内容を視覚化したことで学校危機対応への動機づけが顕在化したことが研修依頼に結び付いた大切なステップだったと思います。

2. 今回の研修で、虐待に関する正しい知識とスキルを持つことで、虐待防止の地域拠点として、子どもの援助職としての意識の高まりがみられました。

園・学校単位での教職員研修の参加者の多くから、より細かいテーマや深める研修への要望が挙げられているのは、知識やスキルを持つことで虐待防止の地域拠点としての役割を果たそうという意欲の表れであり、子どもの援助職であることが研修によって意識化されたものと思われます。

アンケートには具体的に虐待の早期発見・対応において何に不安を感じているのか、何に困っているのかと言語化されています。研修に参加したことによって、虐待防止の地域拠点として次の段階に進んでいることも感じました。

3. 今回の園・学校単位の参加体験型の研修を通じて校内ネットワークが促進（意識化）・強化されました。

研修参加者は、ワークショップという手法であることによって、虐待防止の地域拠点として子どもの変化に気づき、それに対してできることがたくさんあることを自ら発見しています。

また、「話し合いをすることでいろいろな意見がきけたことがよかった」等の記述も多くみられ、共通認識をもって話すという体験によって、校内でのネットワークが強化され、どうしても個人が抱え込みがちな子ども虐待への対応を孤立せずに対応できる可能性が広がったものと考えます。さらに校内ネットワークが意識化されたことによって、学校だけでは対応できないケースについて、外部との連携や専門家の力を借りることの必要性への気づきも生まれています。

4. 虐待防止の核となる人権意識（自分の大切さ）を育む関わりの重要性が意識化されました。

アンケートの中に「子どもが持っている人権を子どもに知らせる」ことについてその大切さに関する記述が多く見られました。「人権意識を育むということをこれまでも言われてきたが、具体的に何をするものかがやっとわかった」「これまで意識してきたつもりだったことがわかった」などの記述もあり、研修によって子どもを暴力の被害者にしない、加害者にしない、傍観者にしないために、その核となる人権意識を育む関わりが具体的にになったことがわかります。また、それらを学校全体で確認し、発達段階に応じてアプローチしていくことが、子ども虐待防止の地域拠点としての学校の大きな役割だという認識が広がったと考えられます。

5. 子ども自身が自分の大切さやけんり（基本的人権、子どもの権利）についての知識やスキルを持つことが暴力防止の大きな力になることへの認識が深まりました。

CAP 子どもワークショップへの参加について90%が必要と回答したことから、虐待防止について子ども自身への働きかけの必要性について認識が深まったと考えられます。これは、教職員ワークショップ研修に参加したことで、ご自身が子どもへの暴力防止に関する知識やスキルを持つてみると、子どもが自分の危機を話してくれることが重要だと考え、今度は子どもへの働きかけを！と、これらのプロセスを経て考えていただいた結果だと思います。なかなか子ども自身が話すことが難しい現状の中ではサインに気づこうとする意識と共に「話していいんだよ」というメッセージの両輪が重要です。その認識を高めることができたものと考えています。

Ⅱ. 子ども虐待防止の地域拠点としての 保育所・幼稚園・学校等の今後の課題と展望

1. 子ども虐待予防の未然防止の取り組みの必要性を意識化し、継続して研修を実施すること。 さらに学校危機対応として子ども虐待防止に関する継続的な校内研修の時間確保を図ること。

各園・学校が子ども虐待防止の地域拠点として、起こるかもしれない危機に対するリスク・マネジメントへの意識をどのようにして高めるのかは、私たち予防教育に携わる者として大きな課題だと感じています。しかし、現場の先生方も多に困り感を持っておられることが今回のアンケートでも明確になったことから、各園・学校、さらには行政の方々にも未然防止の取り組みの必要性を意識化し、継続して研修を実施すること、時間の確保を図れる環境づくりへのご協力をぜひお願いしたいと思います。

2. 学校全体で発達段階に応じた人権意識を育む取り組みを強化すること

「人権意識を育むということをこれまでも言われてきたが、具体的に何をするものかがやっとわかった」というアンケートの声に代表されるように、人権意識の大切さはわかっているけれども、どう取り組むかが漠然としているのだと思われます。人権意識を育む取り組みは、特別なものではな

く、日々の関わりの中でできることで、すでに先生方が取り組んでおられることもたくさんあります。普段の取り組みを人権意識を育む取り組みとして意識すること、学校全体で発達段階に応じた取り組みを共有することが、子どもの暴力にあいやすさを減らすことにつながります。「自分の大切さ」を子どもたちが実感できる園・学校での生活の保障を一緒に進めて行ければと思っています。

CAP プログラムでは、子どもに「あなたはけんりを持っている大切な人だ」ということを伝えていきます。子ども自身への働きかけは CAP だけでなく、日々行われてこそ効果的で子どもを取りまく環境である周囲のおとな、特に教職員の子どもの人権に関する意識が重要なポイントになります。だからこそ、CAP は子どもにだけプログラムを提供するのではなく、教職員へのプログラム提供をまず行っています。虐待防止法第 1 条には「虐待は子どもの人権侵害である」ことが明記されています。子どもへの暴力防止の大きなポイントとなる子どもの人権については教職員の方々と改めて掘り下げる機会を持つべきトピックではないかと思いました。どの子も権利を持っており、あらゆる子どもへの暴力は、子どもの人権侵害であるという出発点を持つことは現在大きなトピックになっている「いじめ」「体罰」などの暴力の未然防止、早期発見・早期対応においてのおとなの毅然とした姿勢にもつながっていきます。

3. 何か起こる前の校内ネットワークの促進（意識化）と強化を図ること

先生がご自分の「あれ？」「おや？」という子どもの変化に関する気づきを校内で共有できると、情報が多角的になり未然防止、あるいは重症化する前の早期発見・早期対応を迅速に行うことができます。一緒に仕事をしていても、情報を共有し、取り組む仲間としての校内ネットワークが機能するためには共に考えること、語り合う機会をつくり、意識してネットワークをつくり、強化していくことが必要です。校内研修はその機会として非常に有効で、ワークショップ形式などによって、意識して校内ネットワークを促進することが子どもの安心・安全を揺るがないものにしていくことだと思います。

4. 援助職としての自分のメンテナンスを意識化すること

子ども虐待防止への意識の高まりの中で、日々子どもと向き合う現場で幾重にも重なった困難な状況への対応に不安や無力感を感じていることがアンケートにあがっています。孤立し、疲弊してしまわないように、援助職として自分のメンテナンスを心がけることへの情報提供が必要だと思われます。

5. 子ども虐待の関係機関との有機的な連携を図ること（外部ネットワーク）

校内ネットワークの促進・強化とともに、外部とのネットワークの強化、すなわち子ども虐待の関係機関との連携を有機的に行うための日常的な事例検討や情報共有が有効だと考えます。要保護児童対策地域協議会などを活用して、情報共有に努め、日頃から相談できる関係をつくっておくことが先生方が安心して対応できる環境づくりにつながります。

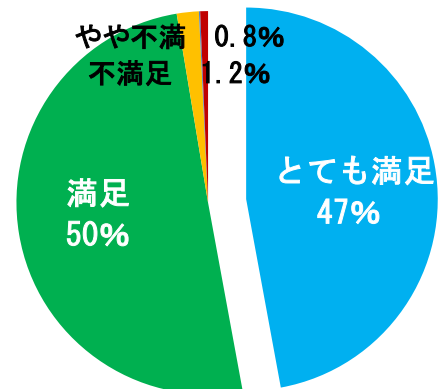
教職員ワークショップに関するアンケート集計と考察

本事業の教職員ワークショップの参加者は 1,013 人（学校数 53 校）。アンケート回収数は、915 で回答率は、約 90%でした。お忙しい中、アンケートにご協力くださった皆さんに心から感謝いたします。以下各項目の集計・分析をご報告します。

1. 本日の「児童虐待をテーマとした CAP 教職員ワークショップ」はいかがでしたか。

教職員研修参加者の参加満足度

1. とても満足	431（人）
2. 満足	460
3. やや不満足	17
4. 不満足	1
5. 無回答	6



研修内容はそれぞれの地域によって異なりますが、97%の参加者からとても満足、あるいは満足との回答をいただきました。テーマを設定し、打ち合わせに伺い、学校のニーズにできる限りそって、ワークショップを組み立てたことがこのような回答をいただいた要因の一つだと思います。

■とても満足・満足の理由としては、

- ・子どもは無力ではない「～することができるよ」とエンパワメントがベースになっていることが分かり参考になった。
- ・現在の子ども虐待、いじめ、暴力などの問題は本当に深刻。そんな中で、どのように考え、していけばいいのか教えてもらった
- ・子どもへの暴力は「安心、自信、自由」の3つの権利を奪うものだ、子どもたちにもしっかりと分かってほしいと思った。子どもの分岐点にいる私たちの役目はとても重要だと感じた。心して毎日子どもたちに接していきたい。
- ・とても分かりやすくとにかく心がスーッと素直になれるような話だった。現実にはこのような問題があるかと思うと怖いですが、きちんと向き合って真っ先に気付ける立場だと改めて感じた。
- ・色々な事情を抱えている子どもと付き合っていく私たち。日々の忙しさに負け話もゆっくりできないことも多い。今日の話は本当に分かりやすくおとなができることが沢山あることがよくわかった。
- ・現場にいる教員として難しいことを色々考えがちだったが基本的な「安心、自信、自由」シンプルな形で皆が笑顔になれる。とてもわかりやすかった。
- ・内容がわかりやすく、活用できると思った。
- ・自分がじっくり考える機会になり、また別の人の違う考えを聞いたのでよかったと思う。
- ・ありのままのあなたで大丈夫という空気が大切ということを知り、私自身が安心した。

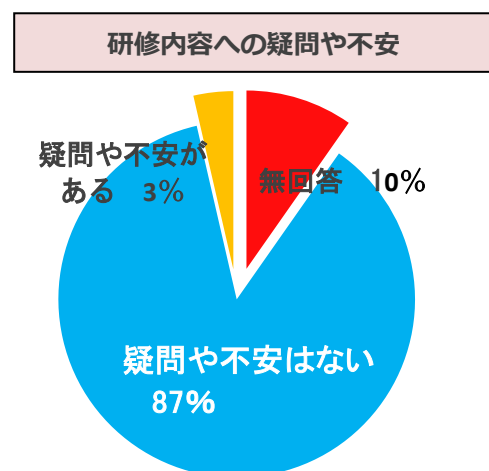
■やや不満足・不満足の理由としては、

- ・こちらの都合で時間が短くなってしまったので、「どんなふうにかかわればいいのか」ということをもう少し教えてほしかった。
- ・時間の関係もあり、具体的な事象に深く踏み込むことはできなかったが、頭の中では数人の頭を思い浮かべながら心理や対応法を考えることができた。
- ・今までに聞いたこともあるし、聞かなかったこともあるし、難しい感じもしたし、評価はよくわからない。
- ・もっと実践的な方法や、実際にあった話などリアルな内容を期待していた。
- ・もっと深く話を聞いてみたいこともあった。
- ・途中からしか聞くことができなかった。（子どもへの対応、出張等）

2. 本日の「CAP 教職員ワークショップ」の内容に、疑問や不安はありませんか？

- | | |
|--------|-------|
| 1. ある | 89（人） |
| 2. ない | 793 |
| 3. 無回答 | 33 |

参加者の 87% から疑問や不安はないとの回答をいただきました。



■ 疑問や不安の理由としては、

- ・実際に虐待のサインに気づけるかどうか不安。
- ・通告しても 9 割近くは在宅と聞くと、対応できるかどうか不安。
- ・最近の子どもは自分の気持ちを表現できなく「黙ってしまう」ことが多い。その時はどうしたらよいのか。
- ・虐待を受ける児童を察知し、受け入れ、安心、自信、自由の気持ちを再構築する作業を私たちができるのか不安である。専門の方の力を借りるべき。
- ・親との関わりに不安がある。
- ・性的虐待について子どもにどう話すのか、どう対応するかに不安がある。
- ・CAP がトークタイム（子どもワークショップ終了後の個別の復習の時間）で子どもから虐待の話を聞いた後の対応が不安。
- ・「けんり」と言う言葉がなじまない感じがした。
- ・時間が足りないくらいだった。
- ・いざというときにできるかどうか、不安。

■ 不安や疑問はないの理由としては・・・

- ・非常に広範囲なものを一つひとつ細分化して取り組むとわかりやすい。
- ・同僚と話せる時間がとれたことがよかった。
- ・学校全体で共通理解を持てたことは今後の大きな力になる。
- ・実際に虐待を受けている子どもと関わる（担任をもつ）ことが不安ではある。しかし、その時には、一人で考えるのではなく先生方に相談をしてその子にとっても周りの子ども

もたちにとっても嬉しい楽しい園生活を送れるようにしていきたいと思う。

- ・聴くことが大切だと実感した。クラス全ての子どもたちにできるかは不安だが、がんばってみようと思う。
- ・年 1 回みんなで考えられるこの機会は大切。

教職員ワークショップへの参加で、ご自身の中で気づきが生れ、次の行動への意欲につながっている記述が多かったのが印象的でした。ワークショップという手法の中で、受講者が互いに学びあい、語り合うことで内なる力が活性化する様子がよくわかります。子どもと関わる教職員の皆さんが子どもへの暴力防止について学ぶ中で、具体的にご自分が関わっている、あるいは関わってきた子どもの顔を浮かべながら、参加してくださっていて、だからこそ、子どもが危機に直面したときのために、具体的な対応を知りたいと思われることが読み取れます。子どもへの暴力に対する知識を深めていただくことが早期発見・早期対応への大切なプロセスだと改めて感じています。

今後さらに未然防止にむけた、状態が重症化しないための予防の取り組みに目をむけ、意識を持っていたできるようにしていく必要があります。それがさらに子ども虐待防止への大きな力になるものと考えます。

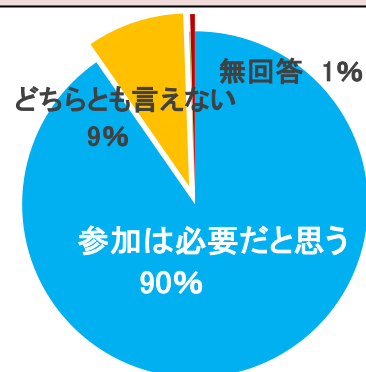
アンケートには、実際に虐待を受けていると疑われる児童・生徒への対応、見守りへの対応に不安を抱かれている記述も多く見られ、今後先生方により安心して子どもたちと関っていただける情報・スキルの提供を心がける必要を感じました。虐待が疑われる保護者への対応についても不安を持っておられることが記述から読み取れます。

さらに虐待や性的虐待が背景にある問題行動、特にいじめについて対応の難しさを感じたという記述が見られました。表面に現れる事象現象や異なって見えても、暴力の構造、そこに存在する圧倒的な力の不均衡は同じですが、どうしても起こっている事象現象に目が行きがちです。しかし、目の前で起きていることへの対応を迫られている先生方にとっては致し方ないことで、子どもの援助職として先生がその力を存分に発揮していただけるような研修内容をさらに工夫していきたいと思います。

3. 「CAP子どもワークショップ」を体験することは、子どもたちに必要だと思われますか？

1. 必要だと思う	827 (人)
2. どちらともいえない	83
3. 必要だとは思えない	1
4. 無回答	4

子どもたちの CAP プログラムへの参加



■参加は必要だと思う理由としては・・・

- ・子ども一人ひとりに「安心、自信、自由」の3つの権利を分かって育ってほしい。
- ・安心、自信、自由という大切な権利を守るための具体的な方法を知ることができる。そして、自分で考えて行動できる力をのばせると思う。
- ・子どものアンケートから実際に自己肯定感の低い子どもが多くそういう子どもが「権利」について学ぶことは必要。
- ・自分の周りに頼りになる大人がいるということを気付くことが大切だと思った。

- ・子どもたちの中には一人ひとりに「安心、自信、自由」をもつ権利があることを感覚的にもわかっていない知らない子がいるから。
- ・こういう機会は大切である。もちろん教師からの話も大切であるがいろんなおとなから話をされるのは良いと思う。
- ・早期発見するために子どもたちが話してくれることが大切。そのためにも「暴力」の認識と子どもの権利の学習は不可欠。
- ・きちんとプログラムされた内容であり、子どもたちにも聞かせたい。
- ・家庭内では、「躰」として暴力が使われることが多いのではないかとと思われる。その様な環境で育った子どもは暴力が当たりまえだと思っている可能性があるから。
- ・知ることが何よりもスタートであると思う。

■どちらとも言えない・必要だとは思えない理由としては・・・

- ・CAP が行うにせよ、学校でホームルームで行うにせよ、「自分の身を守ること」「人権意識を高めること」を教えることは大切。
- ・自分のクラスの子どもには理解が難しいと思う。
- ・ケースバイケースだと思う。
- ・発達段階に応じて知るべき内容だとは思う。
- ・道徳との兼ね合い。学校の実態（安心、自信、自由が保障される校風がある、なしなど）
- ・自分の大切さに気付くことは重要なことだと思う。ただし、必ずしも CAP でなくともいいかなとも思う。
- ・子どもに対する伝え方を慎重に考えなければならない。

予防教育としての CAP プログラムの導入を必要と感じられた方が多く見られました。自分を大切に思う気持ちである人権意識を育むことが暴力防止の大きなポイントであり、保育所・幼稚園・学校だからこそ、すべての子どもたちにそのことを知るチャンスを提供することができます。

発達やニーズにあわせたプログラムであることや、すべての子どもの日常生活を安心・安全・安定したものにしていくことが、学校本来の目的である学びの促進になることをもっとお伝えしていきたいと思います。



4. CAPプログラム全般に関して、ご感想やご意見をお聞かせください。

自由記述の中からいくつかご紹介します。

- ・教師、子ども、家庭と三者にむけてされているところが効果的。
- ・教師には子どもたちの権利を守りながら、学校生活を有意義なものにしていく責任があるが、今日の話で子どもたちの権利を守っていく自信が少しできた。
- ・今日も子どもとの関わりの事でいろいろ悩むことがあったが「聴く」ということを忘れず今日の話を思い出して、また、明日から頑張っていこうとおもった。
- ・毎日の忙しさに流されるのではなく、どの子にも安心、自信、自由を持てる権利のある学級作りに日々努めていきたい。
- ・虐待を受けている子どもたちを発見した後の関係機関との連携については研修することが多いが、暴力防止について研修する機会は少ないので、大変有意義な研修だと思う。
- ・虐待についての認識をあらたにして、自分自身もっとCAPについて詳しく知りたいと思う。現実にある問題の深刻さに今、ちょっと驚いている。
- ・活動自体が広まっておとなの意識が高まっていけばいいなと思った。
- ・普段から刷り込まれたステレオタイプなどが、いかに事実と異なるものかがわかった。
- ・毎年継続して受けることで改めて考えることができた。
- ・教師に対しても、ワークショップが組み込まれていることがありがたい。まずおとなから変わっていかないとと思うから。
- ・なかなか先生方とこんなにお話しできる時間がないのでコミュニケーションがとれてよかった。子どもたちへの声かけを改めていきたいなと感じた。
- ・子どもを取り巻く親や地域の人（児童委員）などにももっと行ったほうがよいと思う。

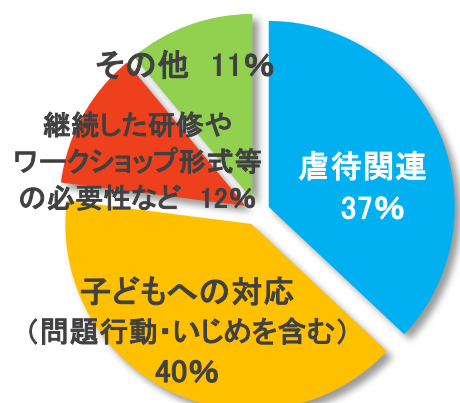
学校現場で日々お忙しい中、熱心に参加して下さった教職員の皆さんにそのお力を存分に発揮していただきたい。それが子どもたちに安心・自信・自由につながっていくとの思いから実施した今回の研修。気づきをもって下さったお一人おひとりの力が子どもの学校生活に変化をもたらすものと確信しています。

時間をどのようにとっていただくかが大きな課題です。長期のお休みに実施したところはゆったりとご参加いただいた様子が伺えました。

5. 今後、子どもへの暴力防止、あるいは子どもとの関わりの中でどのような内容の研修を受けたいとお考えですか？

今後受けたい研修のカテゴリー

- ・子ども同士の暴力・いじめについての研修
- ・悩んでいる子どもに対してどのような寄り添いができるか。
- ・虐待の疑いのある親への見分け方・接し方
- ・ドメスティックバイオレンスに関する研修
- ・対人関係に関する研修
- ・虐待についてさらに深める研修
- ・ネグレクトへの具体的な対応
- ・虐待の早期発見と対応に関する研修
- ・援助者としてのスキルアップ



- ・事例別研修・事例検討
- ・子どもの安心・自信・自由を守る具体的な研修
- ・キレる子どもへの対応
- ・教師に反抗的な態度をとる子どもへの声のかけ方、褒め方を具体的に
- ・子どもの発達・障がいについて
- ・子どもの不安だけでなく、保護者の不安に寄り添っていけるようなスキルを身につけるための研修
- ・「しつけ」「体罰」「暴力」はどこで線引きされるのか

参加された先生方は、さらに学びを深めたい、子どもたちの力になりたいと思ってくださってたくさんの研修テーマをあげていただきました。今後、ご要望に対応できるよう研鑽を積んでまいります。本事業にご協力いただいた教育委員会、園・学校、教職員の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

【教職員ワークショップ冊子の目次】

CAP Child Assault Prevention

目 次

- 1 子どもへの暴力とはなにか
- 2 神話と事実 1
- 3 なぜ、子どもは暴力を受けやすいのか ―3つの要因―
- 4 CAPプログラムの3つの柱
- 5 CAPの3つのアプローチ
- 6 子どもへの暴力を許さないコミュニティをつくる
"CAPおとなワークショップ"
- 7 発達理論をベースに子どものエンパワメントを目的とする
"CAP子どもワークショップ"
- 10 子ども虐待とはなにか
- 12 統計からみる子ども虐待の実態
- 13 虐待が子どもに及ぼす影響
- 15 児童虐待防止法のポイント
- 17 子ども虐待への対応
- 18 学校の果たす役割の重要性
- 19 関係機関との連携
- 23 虐待が疑われる保護者を見分ける手がかり
- 25 しつけに体罰を使うことはどのようなマイナスがあるか
- 26 虐待を受けた子どもに共通する心理
- 27 虐待に気づく手がかり
- 29 ドメスティック・バイオレンス(DV)
- 30 パワーとコントロール
- 31 暴力(虐待)のサイクル
- 32 DVが子どもに与える影響
- 33 性的虐待について
- 35 神話と事実2 一性暴力・性的虐待―
- 36 虐待が疑われる子どもと出会ったら
- 37 子どもの話を聴く
- 38 能動的聴き方のガイドライン
- 39 いじめについて
- 40 もっと学びたい方のために



Child Assault Prevention (子どもへの暴力防止)

子どもたちがいじめ、痴漢、誘拐、虐待、性暴力といった様々な暴力から自分の心とからだを守るための教育プログラムです。ロールプレイや話し合いを通して、誰でも生まれながらに持っている大切な3つの権利 ―「安心」「自信」「自由」があり、もし暴力にあってその3つの権利が侵害されそうになったら何ができるかを、子どもや教職員、保護者、地域のおとなに伝えます。

独立行政法人福祉医療機構(WAM 事業)2012 年度助成事業報告

子ども虐待早期発見への地域拠点強化

事業実施期間:2012年8月～2013年3月末

本事業においてアンケートにご協力いただいたのは、

東京都品川区、福井県敦賀市、和歌山県御坊市、和歌山県広川町、
兵庫県西宮市、兵庫県芦屋市、兵庫県神戸市、兵庫県宝塚市、兵庫県淡路市、
山口県山口市、山口県山陽小野田市、山口県宇部市、山口県下関市、
福岡県久留米市、佐賀県佐賀市、沖縄県北中城村、沖縄県豊見城市、
沖縄県うるま市の教職員の皆さんです。

種別	実施団体数	参加者数	アンケート 回答者数
保育所	11	175人	167人
幼稚園	5	43人	39人
小学校	35	722人	650人
中学校	1	51人	46人
特別支援学校	1	22人	13人
	53	1013人	915人

独立行政法人福祉医療機構 2012 年度助成事業

**すべては
子どもの
安心・自信・自由に**

NPO 法人CAP センター・JAPAN